

課題曲の中の課題 2010

櫛田 朕之扶

昨年と同じように、マーチ 2 曲、その他 3 曲が提出されました。5 曲用意されているわけですが、課題曲 I から V まで見ますと、それぞれ形式・内容・技術の難易度などによって、一つの 카테고리として仕分けされ、定着しているように思います。それはそれで、取り組む側からみて非常に取り組み易く思います。今後、当分の間はこの形で内容・音楽性を深めていけば良いと思います。また、応募する方も、どのカテゴリーの課題曲か、という意図をはっきり持って、応募することが出来るのではないのでしょうか。将来的には、このカテゴリーが多様化していくことも充分考えられます。そのことが吹奏楽の幅をどんどん広げていくのであれば、大変良いことだと思います。

最初に取り上げられている『迷走するサラバンド』は、サラバンド（舞曲）というテーマを、進化した軌跡のドラマとして描こうとしています。ただ、内容が大きく深いものですから、課題曲という時間枠の中で書き切ることは至難のことで、軌跡を劇的に描くファクターの提示に終わってしまっています。音楽を形作る上での要素を見る、という面では大変意義があります。

マーチの 2 曲『オーディナリー・マーチ』と『汐風のマーチ』は、生活・感性・希望・愛といった日常を歌い込んだ昨年のもとは違って、マーチの音楽的なあり方、表現様式を 2 種類提示して頂いています。課題曲として、コンクールに参加するしないに関わらず、マーチに対する考え・演奏表現を捉える意味で、学習する意味は大いにあります。

『吹奏楽のための民謡「うちなーのていだ」』は、ウィンド・アンサンブルの一つの表現形式として、うまくまとめられた楽曲です。民謡という表題は、普遍的な意味で、現代の民謡という、みんなで共有出来る曲、という意味なのでしょう。この曲も、取り組むべき一つの課題を持った、意味のある楽曲だと思います。

『吹奏楽のためのスケルツォ 第 2 番《夏》』は、音楽を捉える視点を、新たなリズム・音色への強い刺激を与える方向に移し、吹奏楽により活力を求めたものです。部分の語法・楽曲構成は把握し易く、そう難解なものでもなく、どんな形でも取り組めるのではないのでしょうか。活動が日常的・習慣的になってしまっているバンドにとっては、非常に良い教材だと思います。ぜひ一度は、取り組んで下さい。

I 迷走するサラバンド／広瀬正憲

“サラバンド”は、古典舞曲としての一つの形式を指しています。起原はペルシア、またはメキシコ・カリブ海地方という説があります。スペインの植民地で流行し、本国スペインに逆輸入されたようです。起原がラテン音楽ですから、かなりテンポの速い陽気な舞曲だったのではないのでしょうか。16世紀初めにスペインで演奏され始め、イギリス、フランスに広がりました。そういった長い歴史をたどる中で、人の喜怒哀楽を歌謡・舞踊に取り込み、17、8世紀にはヨーロッパ全域に流行したようです。

バロック後期に、アルマンド、クーラント、サラバンド、ジグと、組曲の基本形式を作り出す舞曲の1つとなりました。スペインの宮廷舞曲としても愛好され、その摺り足での優雅なステップは、随分と魅力的だったのでしょう。

そのリズムは、2、3拍の結合した（付点4分音符+8分音符）形で特徴付けられます。ヘンデルの『ハープシコード（チェンバロ）組曲』の中のサラバンドが有名で、映画『禁じられた遊び』『バリー・バンドン』『風の谷のナウシカ』などで印象的に使われていますし、TVのテーマ曲としても使用されたり、CMで流れたりしています。

サラバンドの代表的リズム

4分の3で書くと

このリズム音形は、この楽曲でも各部分で多く現れてきます。

さて、この楽曲は、作曲者のこの舞曲に対する思い入れから、サラバンドの変遷をドラマとして描いていこうとしたものです。どのように、といった変遷の軌跡は、作曲者が各部分の表現要素をスコアの前書きに記しておられますが、上記したようにあくまでも表現要素であって、その言葉からは、具体的なものは充分に読み取れないと思います。むしろ、演奏者がドラマを創っていくことが重要です。

【Prologue】

その起原を表現するような、素朴な旋律と揺れ動く流れで迷走への予感を表現します。旋律は、Dドリアンのモードで書かれています。



後半の6連音符の動きは、減5度・増4度主体の音階で、不安な予感を十分に持ったものです。A・Bの2つの半音階を組み合わせた減5度・増4度は、各部分の不安要素として現れます。終止の和音は、この音階を垂直に積み上げたものです。



【A】

湧き立ち広がっていく、表題の Divergents を表すリズムを鋭く表現していきます。基本的には5拍子で記譜されていますが、打ち込まれる和音の位置によって、3・2・3・3・3・2……と変化します。連続するD音は、鮮明に繰り返さなければなりません。

19小節目の4、5拍のウラ拍が、シンコペーションの役割を持って推進力となります。打ち込まれる和音は、付加2・短3和音が繰り返されます。



【B】

con suono ma non legato (non legato であるが響きは保って) の指示がある低音部のリズム声部に、減5度・増4度を持った響きの背景 (Clarinet)、半音階のメロディ (Saxophone、Euphonium) が加わり、高音部のリズム声部と、声部間の錯綜・迷走が広がります。減5度・増4度は、アタックを付加したテヌートで音程を意識出来る表現で、半音階旋律は大きく鮮明なフレーズ感をとって下さい。

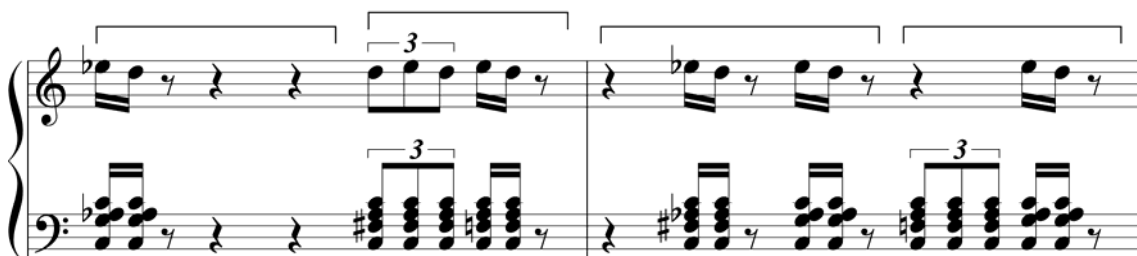
【C】

16分音符の連続で、上方に向かって一層広がっていくという意識で。16分音符+付点8分音符の形も、あくまで16分音符4つの感覚が必要です。全編にわたって16分音符が支配しています。そして最後で accelerando が記されますが、【C】冒頭 (29小節目) から accel.の意識を持って、テンポ100から144へ向かうという感覚です。音列は、全音・半音・全音からなる音階から出ています。



【D】

前半の終結部です。3連符が核になって終結に向かいます。Saxophone セクションと Euphonium のメロディ、Horn のリズム旋律が対位的に流れを作ります。木管高音部へ駆け上がり、Incalzando（熱して燃えて……）の部分に到達します。



【E】

Grave（厳粛な・荘重な・威厳をもって）として挿入された部分ですが、次の部分への導入部ともとれる、一つの落ち着きを持つところです

【F】【G】

Arioso（表情豊かに・歌うように。Aria と Recitativo の中間位）という指定の中間部に入ります。主旋律は、サラバンドのリズム音形を持っています。テンポ 108 という指定ですから、スペイン宮廷舞曲としてのサラバンドの荘重さはありません。優雅な静かな雰囲気を持った主題ですので、この舞曲の変遷の中で、このテンポでこんな雰囲気の時代があったかも知れません。サラバンドのリズム音形、冒頭に置かれた動機が、繰り返され転旋を続けますが、変ホ長調で始まる調性を感じさせ、解り易い旋律です。

Musical score for measures 5-8. Measure 5 starts with a boxed **F** and a key signature change to E-flat. Measures 6-8 continue with various chords and a hemiola section in measure 7.

【G】5小節目からのヘミオラの表現は大切に捉えます。

対位旋律は、【B】に現れている半音階を持った、やや不安感・動揺をもった動きです。

Musical score for measures 9-10. Measure 9 starts with a boxed **F** and shows a melodic line with a half-step scale.

主題は圧縮されながら緊張感を高めていきます。

【H】【I】

【H】が、この中間部のクライマックスと考えられます。発展変奏された主題が、木管群で壮麗に演奏されます。和声は1度・4度を繰り返し、【I】で変イ短調・旋律短音階的に動きながら、最初の変ホ長調に回帰終了します。E♭のミクソリディアン音階で出来たサラバンド音形を持った、*misterioso e sonore*（神秘的な響きで）という指定の部分を経て、後半に入ります。

【J】

【J】から【L】までは、前半の動機が発展された形で、オーケストレーションの密度をあげて全て登場します。前半の進行を追う順序で現れますので、どの要素がどのパートにどのように引き継がれているか、良く解ると思います。

J

BのSax. Euph.のドキュメンタリー

Cの木管群のドキュメンタリー

【K】【L】

リズム動機が発展・展開され、重なり合ってクライマックスを形成していきます。

【Epilogue】

【E】の Grave が転旋されて、荘重に威厳を持って終わります。最後の Piccolo は、サラバンド、とつぶやいて終わります。

II オーディナリー・マーチ／高橋宏樹

マーチと呼ばれたり、マーチ風にと指定されていても、その音楽スタイルには大変多くの表現・形式があります。行進するといった集団パフォーマンスには色んな意味・場合があり、それによって色んな表現が存在するからです。

では、行進する基本的な形って、どんな形をいうのでしょうか。皆さんがマーチに持つイメージによって、この課題曲のイメージが出来てきます。

J.P.スーザの数多くの行進曲が、吹奏楽の行進曲のスタイルの原点というのであれば、この課題曲もその延長線上か、その模倣と見れば良いと思います。

また、C.タイケのように、ドイツ流の堂々としたスタイルがマーチの基本だと考えれば、リズムのがっちりした、硬い表現になると思います。どちらのスタイルを採るにしても、内容的には楽しく行進し、自然に心が和んでいく、素朴な幸福感があります。

ともかく、人が歩くための曲として、2拍子で書かれているのが嬉しいです。ここ数年の課題曲（日本人が創り出した）マーチにみられる、日常的な表題を持った私音楽的な4拍子（テンポも駆け足で）のコンサート指向のマーチと違って、歌いながら、口笛を吹きながら行進することが出来るマーチです。楽しく演奏出来ますが、吹奏楽マーチの原点として、しっかり足を地につけた丁寧な節度ある演奏が望まれます。テンポ112を守って、締まりのあるテンポを作ってください。

<導入部> 【A】までの4小節

4小節目で動き始めるわけですが、静止の中に、この動きを意識したリズム感を持ちましょう。ベース・ラインを含め、和音を美しく響かせます

The image shows a bass line with chords for the first four measures of section A. The chords are E♭, B♭, Cm, E♭, Fm, B♭7, and E♭. The bass line consists of quarter notes and rests, with some notes beamed together.

<第1マーチ> 【A】【B】

リズム感抜群の2つの旋律動機が、楽しさを湧きたたせてくれます。

The image shows two rhythmic motifs for the first march. The first motif is a sequence of quarter notes: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4. The second motif is a sequence of quarter notes: G4, A4, B4, C5, B4, A4, G4, followed by a whole note G4.

このリズム動機を使いながら、A・B・A'・Cという構成で第1マーチが作られています。クライマックスを26小節目から【B】の後半に持ってきます。メロディ・ラインは、アーティキュレーションをしっかりと揃え、コード進行は変化を感じさせ鮮やかに（29、30小節目の2拍ウラにくる7thノートに留意）、Percussionは軽やかに表現します。

尚、Euphonium、Tenor Saxophone などに指定されている、“Play”や“2nd time only”を見逃さないようにして下さい。Trumpet 3、Trombone 1 の B♭ 音は際立った方が良いでしょう。繰り返し後のカウンター・メロディは、Euphonium において、鮮明さが求められます。

<第2 マーチ> 【C】 【D】

【C】の低音部旋律は、いわゆるマーチ形式の常套です。形式は常套といっても、やはりメロディ・ラインにもコード進行にも、新鮮なセンスを感じます。3、7、11 小節目の Horn のハーモニーは、突如来るだけに難しい表現になります。また、フレーズの終わりに半音下降を置く、といった少し今風の感覚も覗かせています。

【D】の前半も、八短調の可愛いメロディが、可愛いオーケストレーションでエポック・ポイントを作り出しています。

<Trio 1> 【E】【F】

通常 Trio では、多くは下屬調（完全4度上）に転調し、旋律的な中間部を作ります。そして、部分転調を繰り返すブリッジを経て、カウンター・メロディと高音部の華やかな変奏を持って再現します。しかしこの曲ではこの形式をとらず、2つの Trio で構成されており、“オーディナリー（一般的）”とは違った意識が見えます。

Trio 1 は、A・B・A'・C の歌謡形式で出来ています。75、76 小節にみる、旋律の2分音符のクリシェ感覚の動きにも、Pops 感覚が見えます。コード進行は、I→IVm→I を最初に設定し、全体の性格を形付けています。

最近の曲（課題曲マーチ）のような、2分音符以上（2拍以上）の譜割りによる和声のサポートを持たないので、Trombone のキザミ拍に和声感を委ねなければなりません。ただ、後半【F】からは旋律がハーモナイズされていますから、このハモリに充分期待しましょう。

それ以上に、“2nd time”の木管高音部を含め、カウンター・メロディが表現の色彩を与える、重要な役割を持っています。

<Trio 2 > 【G】【H】

もう一度 Trio だぞ、といわないばかりに、再び完全 4 度上に転調して 2 度目の Trio を迎えます。マーチの基本形式ですと、Trio が再現されて華やか勇壮に締めくくられるわけです。しかしこの曲の場合、高音部木管群の装飾とカウンター・メロディを持った華やかな全合奏は、すでに Trio 1 の繰り返しで登場していますので、ここでは全く違った楽曲が挿入されています。別のマーチがメドレーのように続くようにも、また長いコーダともとれますし、なんとなく全合奏で終わる、といった雰囲気になっています。前の Trio が大きく広がり、豊かに盛り上がって終わりを迎え、興奮度のワクワク感を思い起こし、マーチの醍醐味をあらためて感じます。

『オーディナリー・マーチ』として、マーチを“オーディナリー”に作曲する難しさ（演奏する側にとっても）は、確固たる形式の存在があるだけに誰もが感じるどころです。やはり、J.P.スーザ氏や C.タイケ氏、K.J.アルフォード氏は偉大です。

Ⅲ 吹奏楽のための民謡「うちなーのていだ」／長野雄行

沖縄音階で書かれた、ウィンド・アンサンブルの曲です。とても解り易く書かれていますので、気持ち良く演奏出来ると思います。

全体の構成は、1 種の変奏曲、またはロンドと考えれば良いと思います。考え方によっては、1 種のジャズと思いたくなります。

構成する各部分は、ウィンド・アンサンブルとしての色々な形をとっていますので、セクション・パートごとのアンサンブルの、良いメソッドにもなるのではないのでしょうか。バンドの編成の大小とか、セクション・パートに偏りがあるといった色んな条件があっても、1 度は取り組んでも良いのでしょうか。

セクション・パート間の受け渡しもスリルがあって面白そうで、5 拍子 (3+2) 書かれたリズム感・テンポ感の格好良さは、きっと楽しい気持ちにさせてくれるでしょう。

コンクールのことは少し横へ置いて、良い気分になって沖縄へ出かけてみましょう。

<Introduction 1> 【A】 までの 8 小節

F の琉球音階+G (琉球旋法第 2 種) で書かれています。Tuba から Trombone へ駆け上がる Bell-Tone が音階の原型 (琉球旋法第 1 種) です。



この曲の主題になっている『ていんさぐぬ花』(沖縄民謡) は、上記のように、原型となる琉球音階に 1 音加わった、琉球旋法第 2 種が使われています。しかしこの主題は、できるだけオリジナルな形で出てきた方が、より印象が強かったのではないのでしょうか。



この部分は、対位的に書かれた 2 声部を、F と C の 2 音 (テトラコルドの核音) が支える、といった形です。

<Introduction 2> 【A】

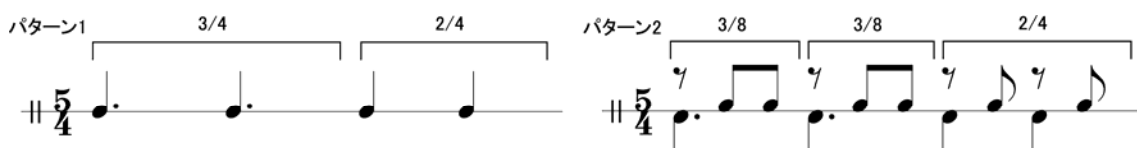
Percussion の連打に全合奏の打ち込み、という沖縄舞踊“エイサー”(伝統的な盆踊りといえれば良いでしょうか) を思わす雰囲気です。Percussion 1 は、Snare off で沖縄打楽器のパーラン

クカシメテークー（締太鼓）、B.D.は抱えて打つウフテークー（和太鼓）を模倣します。打ち込みの和音は、suspended されたコードですが、トップ・ノートによって変化を与えていますから、動くトップ・ノートが鮮明に欲しいですね。



<Introduction 3> 【B】

5拍子の主部に入るためのリズム・パターンが準備されています。この5拍子のパターンには次の2つがありますから、この部分での2小節ずつのパターンで確認してください。



<主題提示部> 【C】

Trombone、Euphonium から Horn、Trumpet とパート間を移動させながら、主題が提示されます（リズム・パターン1）。最後の2小節は、リズム・パターン2で【D】へ進む繋ぎです。



<第1変奏> 【D】

リズムはリズム・パターン2で、アドリブ的なメロディ・ラインはリズム・パターン1と、ポリリズム的な面白さを持った部分です。セクションごとに下降していく動きを、どれだけバランス良く、色彩の変化と自然な流れを持って捉えることができるか、といったところです。セクション間、パート間に技術・表現の差があまりあるようでは、上手いかないでしょう。コード進行は、へ長調のⅠ→Ⅳ→Ⅰ→Ⅴ→Ⅰと進みますから、大変演奏しやすくノリのある楽しい演奏ができます。

<第2変奏> 【E】

ラテン的な感覚のリズム変奏（エイサー感覚）です。ビッグ・バンドのブラス・セクション的な4小節と、弦楽合奏的な4小節からできています。一種のリフと見ても良いのではないのでしょうか。

<第3変奏> 【F】

ベース・ラインによる変奏です。リズム・セクションはパターン1で、メロディはパターン2で進みます。『Take Five』のBassのアドリブなんて考えても、面白いですね。



<主部再現部> 【G】

全合奏で力強く、主部が再現されます。曲の中間に置かれたクライマックスです。全合奏ですから、指定されたアーティキュレーションは絶対的に守ります。

<第4変奏> 【H】

コード進行にIVm→Iの繰り返しを持った、マイナーな雰囲気の変奏です。これまでとは少し違った気分になります。マイナー・6thで流れを切断します。



<終結部> 【I】

沖縄の青い豊かな海、空を見る、大きな広がり of 結尾部です。3度・7度の音を半音下げた、ブルー・ノートが明るい雰囲気の中に、繰り返されるコード進行の中に、ふとフルージーな気持ちを思い起こさせます。そんな Pops フィーリングを楽しめば良いのでしょうか。



<Ending> 【J】

最後 16 分音符で駆け上がる音階は、琉球音階にして欲しかったなあ。



IV 汐風のマーチ／田嶋勉

メロディ・ラインが、美しい流れを持っています。コード進行も教科書通りとはいえ、7th コードの多用・挿入されるブリッジに個性を持ち(この部分のコード進行の設定にも新鮮な感覚)、しかも良く整理されて、全てに渡って優等生マーチです。

課題曲は、吹奏楽がどうあるべきか、の存在と方向を示してしなければなりません。単なる思いつきや、奇を衒ったものでは困ります。この点からこの曲は、現役教育者としての作品として立派なものです。あとは、演奏する側がどれだけ理解し、どのような絵を描くかの課題が残るわけです。どの要素も、パート・セクションに渡りかなり太く書かれています(色々な編成に考慮してでしょう)ので、こういった色彩で描くかには、しっかりとしたイメージが要求されます。

曲の内容は、いわゆる古典的な意味でのマーチというカテゴリーに入るかどうかは別として、マーチする心・気持ち・ムードなどが曲になっている、と考えれば良いと思います。4拍子で書かれていますが、2拍子感覚のリズム感を持っています。4拍子ですが、1・2・1・2と取って下さい。テンポも136と、歩くという以上に浮き立つような気分です。

表題は“汐風”ですので、英訳表題の“Ocean Breeze”が良く合っています。日常生活的な、また季節的なものを越えて、自然の大きさ・豊かさを表現したいですね。上記しましたように、殆ど全パートにスコアされていますので、味付けの工夫・色彩表現の工夫が必要です。とくにダイナミズムの表現には、各部分で各パート別の強弱設定が大切です。

<導入部> 【A】 までの3小節

目の前に海の広がりを見て、一挙に湧き上がる気持ちでしょうか。3小節目でマーチに入ります。シンプルだけに、難しいところです。アクセントの位置を思い切って生かしましょう。

<第1マーチ> 【A】

流れるような美しい旋律です。音域・ブレスなどを考慮して。管楽器の旋律には、弦楽器と違ってある程度の制約を受けます。そこを大変上手く、各パート・セクションを考えながら、合の手のようにカウンターを挿入して、一連の流れ(長いフレーズ)を創り出しています。管楽アンサンブルの旋律手法の1つであるといえます。

【B】

ここでは、コード設定・進行に留意して、とくに全合奏での、和音の響きをしっかり確認したいところです。16・17小節目の2拍目のウラ、18・19小節目のコード進行はクリアーに響かせたいところです。



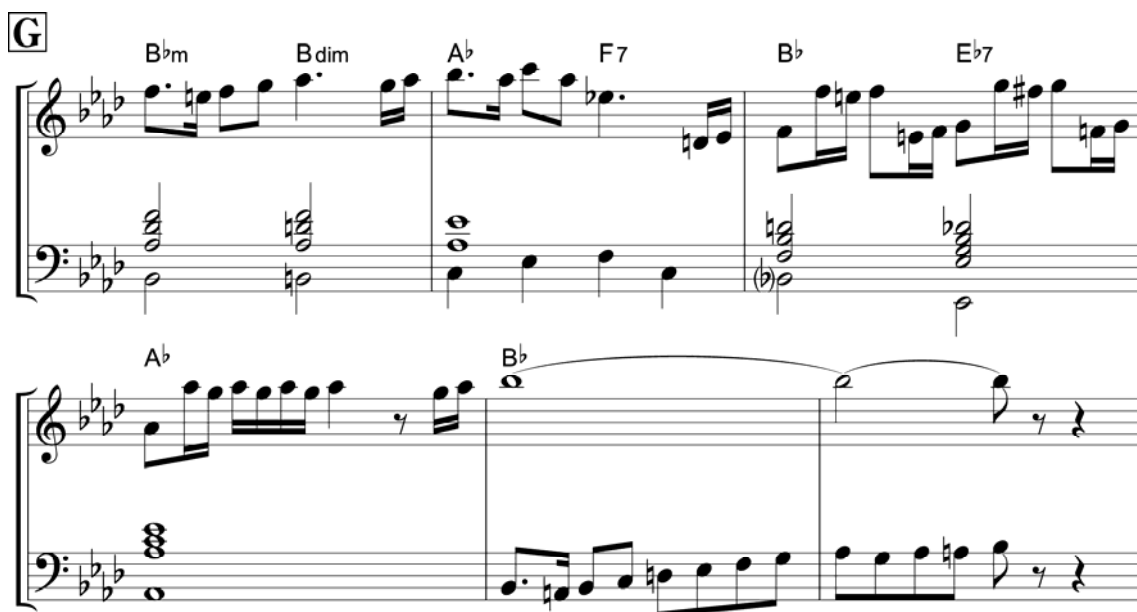
<第2 マーチ> 【C】 【D】 【E】

マーチの定石であり、少し定石破りのところも見えて、大変興味ある部分です。まず、力強い低音部旋律、高音木管群の優しい旋律の交換【C】は定石、【D】は少し形を変えて【C】を繰り返し、終わりの2小節をリズム拡大して【E】へ進みます。この【E】の部分もとても興味のあるエピソードですから、上手く表現したいものです。B♭コードの代理コードF♭を使って、ドミナントE♭へ駆け上がる音階はイントロの模倣。



<Trio へのブリッジ> 【F】 【G】

第1 マーチの動機を少し覗かせておいて、Trio へのブリッジを形成します。【G】では、旋律ラインとハーモニーのラインを鮮明にさせてアンサンブルします。Horn、Trombone、そしてEuphonium で構成されたハーモニーは丁寧に。Glockenspiel の愛らしい音色も聞こえて来なくてははいけません。そして、【G】 B♭m7 (II m7) から変ホ長調・Trio への転調句を形成します。



<Trio 1 > 【H】 【I】

Trio へは下屬調に転調する場合がございますが、ここでは屬調の変ホ長調の Trio を迎えます。

Alto Saxophone のみに旋律を託すという大胆さ（？）が、ハッと聴衆を捉えて、効果的です。ここでも、Glockenspiel が注目されます。昔ですと、Bell lyra（ベルリラ）が活躍したのではないのでしょうか。【I】からは、Piccolo と Euphonium が加わる、というシンプルなアンサンブルで、とても新鮮な感じがして不思議です。

<ブリッジ> 【J】【K】

【J】の2小節ごとの構成がはっきりしていますから、その通りの音色構造が必要です。ブラス・セクションは、節度を持って（豊かな柔らかい響き）の対応が望まれます。それぞれのフレーズは、それぞれの調性感を持って進みますから、その部分の調性のしっかりした把握に留意して下さい。

【K】からは、Trumpet 2nd・3rd を加えたコード進行によって、変イ長調・Trio 2 に入るドミナント楽句を作ります。

K

<Trio 2> 【L】【M】

古典的なマーチ形式で見られる Trio の再現ではなくて、第2トリオで最後を締めくくります。Pops 的な歌謡形式としての課題曲が生んだ、1つのマーチの形式なのでしょう。ここまで出て来たリズム動機の全てが使われて、全合奏を作り出しています。音色構造としては、Trio の再現を思い起こさせる錯覚を感じさせて巧妙です。

フレージングを守る

ハーモニーを美しく

D^{\flat} D^{dim} C^m $C^{\flat dim}$ $B^{\flat m7}$ $E^{\flat 7}$

<Ending> 【N】

やはり主題のリズム動機を滲ませながら、音階を掛け登って終わります。最後まで一貫した要素・構造を持っています。

V 吹奏楽のためのスケルツォ 第2番《夏》／鹿野草平

課題曲Vに対しては、否定的ではありませんが、今まで積極的ではなかったと思います。でも、一昨年あたりから、設定された意図が理解出来るようになりました。音楽の持つ情感だけではなく、躍動感・運動性・ダンシングなどを、表現の核に持って来ようとする試みです。今年度のこの曲を見て、そのことが吹奏楽の1つの方向・カテゴリーとしての存在を、鮮明に受け止めることができました。確かに、この曲は吹奏楽に変化と活力を与えてくれるものです。およそ、音楽とは・吹奏楽とは、といった一つの世界の中だけで活動していることに対する、一つの課題を与えてくれた、といえます。日常の活動に、習慣的な閉塞感を感じているバンドの皆さんには、ぜひ演奏を試みて欲しいと思います。新しいイメージの発想に役立つと思います。

この曲は、音で作成されたアニメーションともいえます。1コマずつ積み重ねていく、動画の手法で作られているようです。手描きであれ、CGであれ、その積み重ねは動機を発展・展開させる、作曲の手法となんら違いはありません。自分の発想を楽譜にし、PCで演奏させる、といった初期DTMから、逆にPCで作成したDTMを人間で演奏しよう、という試みもわけです。誤解されては少々困りますが、例えばゲーム『太鼓の達人』はDTMの一つとも言えますが、それに人が挑戦するわけで、そこには1つの音楽表現としての、音楽性を充分に感じます。いわゆる“電波ソング”の存在もそうですし、DTMが、生演奏に充分活力を与えるシーンを創り出すことになって来たかな、と遅ればせながら思っているところです。

演奏に際しては、指示されているアーティキュレーション・強弱は、絶対的に記譜を忠実に再生(!)します。テンポは少し余裕が与えられていますが、その部分において、設定したテンポは絶対守ります。古典的アゴギクを駆使(?)したり、「歌って歌って」と大声を上げたり、しないで下さい。日頃、「お前とこのバンドは機械的な演奏だ」といわれているバンドは、その日頃が(良い意味であれば)生きて来ます。コンクールは別として、一度は演奏してみるべき曲です。音楽の考え、演奏というものの考えが、別にあるんだということが分かってくることでしょう。

【1】【2】

変拍子を駆使した、躍動感溢れる主題です。セクション・パートが一つの太い色彩ラインとなって、入り乱れ交代を繰り返しながら変拍子を疾走します。16分の5(3+2)を核にして、16分の4(記譜は8分の2)、5、6(記譜は8分の3)のパーツで組み立てられています。

The image shows a musical score for three staves. The first staff is in treble clef with a 5/16 time signature, followed by a 2/8 time signature, then 5/16, and finally 3/8. The second staff is also in treble clef with the same sequence of time signatures. The third staff is in treble clef with the same sequence of time signatures. The music consists of rhythmic patterns of eighth and sixteenth notes, with some rests and accidentals.

旋律のハーモナイズは機能和使用しないので、1音に対する響きという感覚で作っています。この曲の場合、不協和音でなく、4和音（7thコード・6thコード）を使って、比較的ニュアンスのある響きが与えられています。ただ、機能和使用としての機能が発揮できないように、殆ど転回形を使っています。また、ハーモニーに対して、ベース音は意図的に不協和するFをペダル・ポイントに使って、ノンダイアトニックなポリコードを感じさせています。

臨時記号はその音のみ有効

【3】

第2部、コンテンポラリーなプログレッシブ・ロック的な基本リズム（ベース・ラインと Drums が作り出す・ブレイク・ビーツ・タイプの）にのったダンシングです。それぞれ、分かり易く書き直して見ます。

異なるリズム形を持つ3つのユニットを作り、木管群・ホルンが絡んでくる、といった形を取っています。

- ・ユニット1：Alto Sax. 1、Trumpet 1、Trombone 3
- ・ユニット2：Alto Sax. 2、Trumpet 2、Trombone 1、Euphonium（ポリコードの動きが見られる）
- ・ユニット3：Tenor Sax.、Trumpet 3、Trombone 2

それぞれのユニットの表現、ユニット間の対比的な表現は、指定されたアーティキュレーションは維持するとしても、表現法としての、古典的な手法や習慣的定石は全て排除すべきです。

【4】～【7】

第3部、変拍子に戻ります。モノクロ・線画のタッチの部分です。色彩感は無いのですが、そこには各部分の濃淡を見ることが出来ます。

【8】

第2部の冒頭部を覗かせて、【9】のTubaのモノローグに移ります。

【9】～【12】

第4部、Tubaのモノローグです。このソロは絶対Tubaであって欲しいです。このソロを語る事の出来るTuba奏者が見当たらなかったら、少くともこのシーンは、断念せざるをえません。中間部に置かれたこのTubaのモノローグは、シェークスピアの悲劇的クライマックスを演出する、“ハムレット”、“マクベス”、“リチャード3世”のモノローグが聞こえてきます。そこに風鈴が囁く。このドラマはまだ続くのだ。

【13】【14】

第5部、線と色彩を鮮明に分けられた部分です。16分の5(3+2、2+3が交互する)を核にした、第1部と同じ変拍子で進みます。色彩を与える和声は、3層構成のポリコードを形成します。3層という多重性は、音域が重ならないように、共通音を持たないように、和音を作ります。最低音(Bass)の倍音列の中から、高次倍音で和音を作って行くと、共鳴効果のある独特の響きが得られます。

倍音列

この範囲の音で和音を作る

88 94 100

【15】

【16】への導入部。

【16】【17】

拡大された【13】の線と色彩の描画は、より色彩感を加えます。最終、第6部の前半。拡大されたリズムが一瞬重なって、クライマックスを迎えます。

【18】【19】

16分の4、16分の5のプログレ・ロックのDrumsに乗って、完璧に色分けされたユニットが競演し、クライマックスを形作ります。圧倒的響宴です。

【20】

ジャズのフォームを思わず、Drums ソロです。Senza Misura（拍子、拍節をなくして）と指定されて、フリーの Drums ソロが期待されていますが、与えられた譜面では、拍子感があります。

【21】

このアニメーションのラスト・シーンでしょうか。何が起こり、何が終わったのか、演奏者が楽しめる、納得できる部分です。ここで、満足感を持つのか、単にほっとするだけか、もうカンベンして下さいって言うのか、その辺り本音が出て来ます。

【22】

エンディング。お疲れさま。作曲者の仕掛けに、キッチリはまりましたか。ここは、やはり何があっても、逆にこちらからはまり込む余裕が欲しいです。何せ、気持ちの整理だけは出来るはずです。もやもやがなくなるはずです。日頃なんだかんだといってくる、指揮者・先生の顔も、いつもと違うはずです。……で、落着。

来年度からは、課題曲 V への応募が俄然増えるのでは、という期待感を持っています。作曲者の意図された吹奏楽への活力に、より推進力が加増されることを願っています。比較するのも何ですが、オーケストラのスコアを移し替えただけの編曲(?)のものより、ずっとずっと興奮してきます。

●1つの練習法●

第1部であれば、同じパートの1・2・3のいずれかのパートを取り上げて、全員で演奏します。完璧に出来たところで、1・2・3各パートに別れてパート練習に移ります。これを各パートで行い、全合奏に移ります。各パートが完全に演奏できるまで、全合奏に入ってはいけません。最も注意しなければいけないことは、言うまでもなくテンポを守ることです。

第2部であれば、各ユニットで同じことをやります。

第3部は、【8】の3小節前までは、参加する全員が集まって2声部に別れ、上声・下声の2つのユニットとして、2つの大きい線を作ります。【18】からは、PCでの打ち込み(Drums)音を、メトロノーム代わりにすると良いと思います。

2010 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲分析

課題曲の中の課題 2010

監修・著作：櫛田 肤之扶

編集・制作：株式会社ウインズスコア

配布・公開日：2010 年 6 月 1 日

楽譜引用元：

広瀬正憲・高橋宏樹・長野雄行・田嶋勉・鹿野草平

『2010 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』全日本吹奏楽連盟、2010 年 2 月 1 日発行

※本書の著作権保有者は、著作者である櫛田 肤之扶であり、櫛田 肤之扶の協力・許諾のもと、(株)ウインズスコアが本書を制作・配布・公開しております。

※本書に掲載されている楽譜の一部は、『2010 年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲』からの引用であり、全日本吹奏楽コンクール課題曲の権利は、(社)全日本吹奏楽連盟に帰属します。

※本書の配布・コピー等の利用については、本書の内容・目的を理解した上で、金銭の受け渡しが発生しない場合に限り許可いたします。

※本書を使用するの、第三者との紛争・トラブルが発生した場合、著作者・制作者、及び(社)全日本吹奏楽連盟は一切責任を負いません。